

NEARプログラム効果の検討

Key Words : 認知機能, 認知リハビリテーション, 精神科デイケア

吉田保奈美, 面本麻里, 岡崎智行, 浅岡聡,
村田貴徳

医療法人社団 更生会 草津病院

はじめに

統合失調症患者では就労や対人関係をはじめとした社会機能障害が課題となりやすい。近年、社会機能に影響する要因として認知機能が注目されている。そこで今回我々は認知機能リハビリテーションの一つである NEAR (Neuropsychological Educational Approach to Rehabilitation) を精神科デイケア通所中の患者を対象に実施した。プログラム出席率, 実施前後の認知機能および QOL, 自己効力感について調査し, プログラムの有用性や実施可能性について予備的に検討することとした。

方法

精神科デイケアにおける NEAR に参加し, 研究同意が得られた 9 名を対象とした。①プログラム出席率を算出し, ②認知機能: BACS-J, ③包括的 QOL: WHOQOL-26, ④自己効力感: GSES を NEAR 前後に評価し, t 検定にて比較した。統計解析には HAD を用いた。本研究は事前に実施病院の倫理委員会による承認を得て実施した。

結果

①本研究参加者の平均出席率は, $94 \pm 6\%$ であった。NEAR 前後で, ②BACS-J は有意に上昇した (総合指標 $d=0.71$)。特に, 言語流暢性で大きな上昇が見られた。③WHOQOL-26 や④

GSES では, NEAR 実施前後で有意差は認められなかった。

考察

先行研究¹⁾と比較しても高い出席率が見られ, 参加に対する動機付けが維持されたことが示唆された。欠席者に対する個別フォローを実施したことも動機付けの維持に影響したと考えられる。NEAR は神経心理学を理論的背景に持ち, 行動学習理論も取り入れられており²⁾, 内発的動機付けが高まる結果, 参加者の学習が進み, 認知機能が改善すると考えられている。今回の参加者の認知機能の改善にも動機付けが影響した可能性が考えられる。一方, QOL や自己効力感の改善は認められなかった。高い認知機能は主観的満足感が低下する可能性があるといわれている。したがって, 認知機能が改善したために QOL や自己効力感が改善しなかった可能性が示唆された。NEAR の効果が社会生活へも波及されるためには, 認知機能の改善やメタ認知の気付きを実生活の場で使ってみることが重要である³⁾。また, 就労支援をはじめとした他の治療プログラムと組み合わせることで効果が上がるといわれており²⁾, 今後の課題であると考えられる。

文献

- 1) 北村直也: 統合失調症, 発達障害, 感情障害に対する認知リハビリテーション (NEAR) の効果に関する検討, 川崎医学会誌, 43 (1), 29-41, 2017
- 2) 中込和幸: 認知リハビリテーションはリカバリーにつながるか? 臨床精神薬理, 16 (7), 1073-1078, 2013
- 3) 渡邊由香子, 柚山明日香, 松田康裕, 木村美枝子, 納戸昌子, 吉田久恵, 條川佐和, 久保田佳美, 池淵恵美: 認知機能リハビリテーションの実施と有効性について, 精神科治療学, 27 (4), 521-528, 2012